

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話：070-1503-6401/044-988-0004
<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>
 第167号

かわさきの
郷土史を読む 7

伊藤葦天著『川崎新風物詩』・『川崎風土記』(その3)

川崎市教育委員会事務局文化財課学芸員 新井 悟

伊藤葦天氏の2著の中から、中世の城跡の話をする前に、閑話休題。麻生区、多摩区に関係する話をいくつかとりあげてみます。『川崎風土記』の中から、「天神様の尻尾」(同書 27 頁)と「聳の火もし」(同書 134 頁)・「(続)聳の火もし」(同書 137 頁)、『川崎新風物詩』の中から、「王禅寺」(同書 98 頁)を紹介します。

「天神様の尻尾」

登戸の狐の話です。「多摩川の付近には昔は狐がたくさんいたものであります。霜の降った夜なぞ更けると狐がコンコンと鳴いて淋しかったものです。」とはじまります。多摩川の土堤でよく職人さんが狐に化かされたといひます。

登戸には職人さんが多かったといひます。「登戸は二百戸足らずの村で職人が七十数人おり、大工、左官、鳶、建具屋等、何でも居りまして三里四方の村々への職人の供給地でありました。」。その中で左官のKさんは、つむじが曲がっていて、「天神様」とあだ名をつけられていました。その「天神さん」、冬の寒い朝はやく、お得意様のお屋敷にうかがいます。旦那はまだ寝ていて、女中さんだけが働いています。「天神さん」は、表の台に腰かけて旦那を待っているうち、うたた寝をはじめてしまいました。女中が様子を見ようと、狐の太い尻尾が「天神さん」の尻の下から垂れ下がっています。さあ大変。女中は、最近悪さをして困りものの狐が化けているのだと思い込み、家じゅうの者を集めて棒で叩こうとします。「天神さん」に危機迫る。

実は、防寒のために着込んだ、狐の毛皮の尻尾が飛び出していたのでした。

防寒着の狐の尻尾が出ていたところから始まる勘違いという組み立ては、落語の「紋三郎稲荷」と通じるところがあります。落語の方では狐の胴服を着こんだ武士が町民をだます展開ですが、登戸の「天神様」は危うく命を狙われそうになるところが違います。本当の話でしょうか。愚問でした。こういう話で座が湧いた時代があったということですね。なんだか懐かしい気がします。

「聳の火もし」・「(続)聳の火もし」

早野の婚礼の話です。かつて結婚式の夜、聳が嫁とならんで晴れの披露宴の座敷には座らないという風習を取り上げたものです。いつまであった習わしかは明らかではありませんが、昔の婚礼の様子を紹介しながら、早野の鎮守「子の神様」への遠慮という説や、東京の府中市の大国魂神社から伝わったという説をとりあげています。

「王禅寺」

王禅寺の話です。伊藤氏は親交のあった北原白秋にお寺を紹介した話をのせています。「或る時白秋に一度行って見給えと言ったら、やがて白秋は歌の門人と吟行を試みて、ひどく気に入り、王禅寺の名文を『多磨』に発表して激賞した。(改行)仁王門の前の梅林なぞ無造作の中に余所で見られぬ閑寂がある。赤松に適した土壌と見えて昔は亭々たる松が鬱蒼としていたが、今はたんと立っていない。(改行)白秋が生きていたら、王禅寺は深大寺以上に世の中へ紹介されていたかも知れない。柿の頃もいいが、まあ浅春の吟行にはもってこいのところである。」。この春にお出掛けするのも丁度良いのかも知れません。

ご興味がある方のために、川崎市立図書館の蔵書をご紹介します。『川崎新風物詩』は、川崎、中原、高津、多摩、柿生の各図書館に所蔵されています。柿生には貸出用がありますが、ほかは貸出禁止となっています。『川崎風土記』は、川崎、幸、中原、高津、多摩、麻生の各図書館に所蔵されています。高津・多摩には貸出用がありますが、ほかは貸出禁止となっています(2022(令和4)年1月4日時点)。なお伊藤氏には多くの著作があります。このうち、川崎市立図書館に所蔵されているものをご紹介します。郷土史関係の著書には、『稲毛三郎重成と榊形城址』(1955)、『掘出した伝永徳の屏風』(1956)、『中野島開発記』(1957)、『稲毛郷土史』(1970)があります。さらに文学関係の著作として、『六月之旅』(1965)、『葦天随筆集』(1969)、『穂 一伊藤葦天句集一』『多麻澁 一伊藤葦天第二句集一』(1971)、『多麻澁以後 一伊藤葦天遺句集一』(1975)ほかが所蔵されています。

参考文献

伊藤葦天 1958『川崎新風物詩』 かわさき新報社

伊藤葦天 1963『川崎風土記』 川崎新聞社

都市化と文化財、両立に知恵を結集する

村田 文夫(日本考古学協会会員)

都市化と文化財の保護は、常に衝突してきたが、両立させる知恵はないものか。両立に向けた挑戦は今もつづいています。その事例を長尾東高根遺跡とシラカシ林の保護で見よう。

東高根遺跡とシラカシ林保護の経緯など

東高根遺跡は、稲作を始めた弥生時代のムラ跡。そのムラ跡を取り囲む斜面には、潜在的な植生のシラカシ林が繁茂し、昭和46年(1971)12月21日、神奈川県史跡・天然記念物に指定されました、と紹介しても、何が重要なのだ、というブーイングが聞こえてきます。では、簡単に経緯を説明しましょう。

(1)神奈川県住宅供給公社が、宮前区神木本町に位置する東高根に宅地開発計画を立てました。が、そこは弥生時代の集落跡。(2)県・市の教育委員会は、文化財保護法に基づき発掘調査が必要であると説明。(3)昭和44・45年の調査で予測どおり弥生時代の集落跡であることが判明。ほぼ同時期、遺跡を囲む斜面地のシラカシ林が、植生学上重要な天然記念物であることが判明しました(文化庁の報告書)。(4)これを知った市民からは、両者を一体的に保護すべきとの声があがり、結局、宅地造成計画は撤回され、県・市の共同管理で保護されました。

このように、遺跡の調査から全面の保存、県史跡・天然記念物指定までの措置は、じつにスピーディでした。いま考えると、昭和30年代、川崎市は「工業都市」として大発展。だが、同時に「公害都市」との汚名も定着、県・市は「文化都市」への転換へ。古代遺跡と当時の潜在植生が保護されていた東高根は、格好の素材になりました(写真1)。稲作づくりの弥生集落跡。耕作に必須の農耕具は、斜面のシラカシを伐って加工。遺跡・シラカシ林を囲む谷戸部は、初期稲作耕地(谷戸田)としても可能。この分かりやすい3点セットは、広く共感を呼びました。

遺跡保存と活用方法の模索はつづく

史跡の保存は、その魅力的な活用こそが本命であります。遺跡を地域の教育的・観光的な資源と捉えて活用を目的とする『観光考古学会』が、令和元年(2019)に発足しました。すでに科学的な裏付けを得て生命を注入し、公開された史跡は枚挙にいとまがありません。

東高根森林公園でも、その第一歩が平成27年(2015)に試みられています。東高根遺跡は、確認調査以降、間を置かずに県史跡として現状保存され、以後は埋め戻された状態で公立公園内に保護されてきました。でも、試掘調査が本当に正確なのか知りたくありませんか。

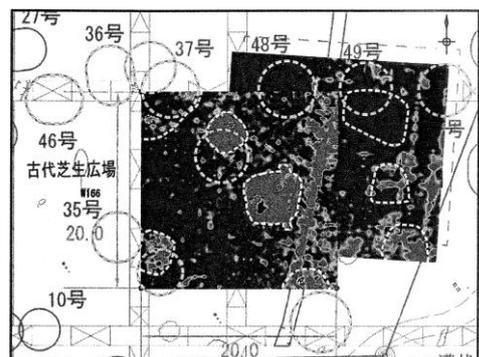
平成27年(2015)、その知的好奇心を満足させる地下レーダー探査調査を県関係機関が実施しました。発掘せずに、地表からのレーダーで地下の状況を探したところ、昭和44・45年の調査結果は十分に正確でした(第1図)。このような成果が、最新の機器類で東高根森林公園内のパークセンター等で情報発信されたら「観光考古学、へ踏み出すチャンスですね。

でも、仮に盗掘という悪巧みをしようとする人達には、「ここ掘れワンワン」です。さらに根本的な問題は、何故、史跡指定内を掘る必要があるのか、ということ。指定史跡を掘って現状を変更することには、文化財保護法や県・市の保護条例で厳密に規制されています。観光考古学は、文化財を有効利用して教育普及や地域経済の振興に寄与することが期待される半面、法・条例との関連性は重要で、東高根遺跡・シラカシ林の活用についても、その点からの検討も必要ですね。

関連して興味深い本当の話。徳川光圀(水戸黄門様)は佐々宗淳・大金重貞らに命じて、元禄5年(1692)、栃木県那須の上侍塚・下侍塚を発掘された。目的は、塚が那須国造の墓であることを証明するため。しかし掘り出されたものは古墳時代の遺物類。黄門様は事態を知り即刻調査を中止、遺物類は図・文字で正確に記録し、発掘品は箱に入れて墳丘内の旧の位置に埋め戻されました。最高の保護措置が、最古の発掘事例で実践されていたわけです。さすが、黄門様ですね。



(写真1) 東高根遺跡(中央台地)とシラカシ林(斜面)



(第1図) レーダーで探査された住居跡(中央部)

シリーズ

教育の歩み 第3部

日本の学校と教育(23)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

学級共同体の創造

こうして生まれてきた学級の一体性を、より強固なものにするために、様々な学級文化活動が展開されてゆきました。例えばある教師の発案から生まれた学級誕生会の毎月開催は、誕生日を祝ってもらう習慣など、まるでなかった寒村の子どもたちにとって、とても新鮮で強烈な印象を残しました。学級新聞や学級図書館などの活動も、子どもたちにとって興味の持てる事柄でした。こうして学級は、いつしか学習活動の便宜を図るための手段であることを超えて、地域共同体とは異なる学級共同体とでも言うべき、独特な集団に成長していったのです。

こうした学級共同体を、さらに強固なものとしていく上で、重要な役割を果たしたのが、「生活綴り方運動」でした。この運動は、主として東北地方の貧しい農村を舞台として成長し、全国的に広まっていった我が国に独自の教育実践として知られています。この運動は、大正期に芦田恵之助(えのすけ)や鈴木三重吉らの提唱によって始められ、特に鈴木が創刊した児童雑誌『赤い鳥』が、読者である子どもたちに自由に、そして気持ちのままに文章を綴ることを推奨したことから、次第に広く教師たちの賛同を得るようになり、映画化もされた『綴り方教室』などの名編を輩出。戦時色の強ま



映画『綴り方教室』(1938年)のポスター



映画『山びこ学校』(1952年)の一場面

った昭和10年代の一時中断を挟んで、戦後に復活し、無着成恭氏の教育実践記録『やまびこ学校』の公刊と、名匠今井正監督の手になる映画化が評判を呼び、全国的な運動となったことが知られています。

生活綴り方運動は、作文指導を通じて教師が生徒たちの内面に立ち入り、一定の影響力を及ぼすことを可能にする道を切り拓きました。「教える」と「教わる」という垂直的な関係と、「共に学ぶ」あるいは「学びあう」といった水平的関係が共存することを、可能にしたのです。学級共同体という、感情的な一体性が築かれた教室の中で行われる作文指導は、「自分の気持ちの流れをありのままに書くんだよ」という指導の下で、添削活動を通じて、教師が生徒たちの内

面に入ってゆくことを可能にしたのです。こうして生徒の内面は、無意識のうちに、教師による誘導を受けるようになり、教師は作文指導を通じて、生徒たちの内面に働きかけるなど、生徒指導の技能を磨くことが出来たのです。作文指導を通じて、子どもたちの家庭環境の理解も可能になり、熱心な教師の中には、子どもたちの家庭生活にまで入り込む方が現れるなど、特殊日本的な教育関係が出来上がっていったのです。

このようにして日本の教育は、様々な学校行事を梃子に、独自の文化的生活共同体とも言うべき、学級共同体を創り上げていったのです。教師と生徒の心の交流、精神的一体性の構築は、確かに学校教育のプラス面として捉えられるのですが、良き教師たろうと心がける教員に対し、過度な負担を強いたことも事実でした。日本の教育は学力低下が声高に叫ばれた2000年飛び代においても、特に初等・中等教育段階においては、なお世界的に見てハイレベルな水準を保っていました。世界的に見ると、相当の劣位にあると認めざるを得ない高等教育に比べれば、はるかに優れた水準を保っていたのです。ただかなりの時間を犠牲とする、種々な学校行事を見事に運営しながら、教育の質を下げずに生徒たちの学習指導を、淡々と続けていくことは、教師たちにとって大きな負担であっただろうことは、容易に想像できます。

義務教育期間の延長

戦前の学校教育に戻りましょう。4年制の義務教育を終えて、同じく4年制の高等小学校に進学する子どもたちが増えてきた1908(明治41)年、義務教育年限が6年間に引き上げられます。尋常小学校が6年間に延長され、高等小学校は2年間に短縮されたのです。この制度変更に合わせて、小学校での教育内容にも、大きな改編が加えられました。天皇中心の世界観や社会観を、子どもたちに植え付けるという基本線に変更はないのですが、世界地理や理科などの授業が増えるなど、日本の大国化を見据えて、世界の国々への関心や科学的認識を育てることに、注意が払われるようになったのです。当然教える側の教師の負担も、重くなっていったのです。

(続く)

柿生・岡上の地域文化財

岡上(3) 昔を今に伝える石造物

岡上に親しむ会(郷土誌会)

江戸時代、村の辻にはお地蔵様や庚申様が祀られ、講や巡礼などの記念碑も建てられました。岡上地区では地元の人々の手によって大切に守られ、現在でも生活の一部として親しまれています。

川井田の畑の石造物

- ①庚申塔
- ②巡拝塔(西国秩父坂東供養) 寛政6年(1794)



本村橋の袂の馬頭観音

天保10年(1839) (馬持講中)



川井田の辻の石造物

- ①セエノカミ(賽の神)
- ②巡拝塔(四国西国秩父坂東供養) 文政2年(1819)
- ③馬頭観音 明治27年(1894)
- ④地蔵菩薩 宝暦11年(1761)

谷戸の辻の石造物

- ①地蔵念仏供養塔
- ②庚申塔(女講) 安永2年(1773)
- ③光明真言供養塔
- ④巡礼塔



「賽の神」はムラの境で邪悪な物の侵入を防いでくれ、また道行く人を守る道祖神です。岡上ではセエノカミと伝承されています。藁葺き屋根は近所の方が毎年葺き替えています。「地蔵菩薩」は衆生を救ってくれる菩薩様で、民間信仰と結びつき、人々のあらゆる願いを叶えてくれる身近な仏様として親しまれています。「馬頭観音」は元は忿怒の相をした、災いを打ち砕く観音様ですが、後には馬の供養や無病息災の願いを込めて建てられました。本村橋の袂の馬頭観音は馬持講中が建てたもので、鶴見川の河川改修時に現在の場所に移されました。花が絶えることなく手向けられています。「庚申塔」は庚申講の永続を記念して建てられたものが多く、谷戸の辻の庚申塔の施主は女講です。現在でも管理は谷戸講中が行っています。「巡拝塔」は四国・西国・秩父・坂東などの観音菩薩札所巡礼の大願成就を記念して建てられました。

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

- ◎開館日: 4月2・16・23日(毎土曜日) 5月8・22日(毎日曜日)
- ◎開館時間: 午前10時～午後3時(緊急事態宣言等発令の場合は休館となります。セミナーも再々延期です。)

【お知らせ】第84回カルチャーセミナー「秩父流平氏 畠山重忠と稲毛重成～その鉄並びに杉山神社とのかかわりを追う～」は新型コロナウイルス禍が収まるまで延期とさせていただきます。